『発心集』成信・重家出家譚に関する一考察

――慶祚の涙など――

住谷伊代子

はじめに

王朝時代、有力貴族の子弟である源成信と藤原重家は、ほぼ時を同じくして道心を深め、互いに導き合い引かれ合うようにして出家していった。栄達が約束され、周囲の人から見れば満ち足りた日常を送っていたはずの二人が、未来を捨ててまめやかに出家したこと。また二人で出家せざるをえない内面の弱さ、純粋さ。それらは当事者だけの問題にとどまらずに、世間の耳目を集め、行成や公任ほか同時代の人々の深い共感を呼んだ。

さらに、出家事件から約二百年後になって、『今鏡』をはじめ、『宝物集』『古事談』『発心集』『続古事談』、また『愚管抄』に取り上げられ、多様に説話化されていった。中世初頭の人々（特に隠者や文人と呼ばれる人々）にとっても、やはり心に沁みた出来事であったと言えよう。

ところで、成信と重家の同時出家の戒師となったのは三井寺の慶祚阿闍梨であり、『今鏡』『古事談』『発心集』に触れられている。一見すると慶祚は説話中では脇役として登場しているようだが、実は同時出家に重要な役割を果たした人物であり、彼を接点に考えてみると出家譚の意外な奥行きが見えてくるようで興味深い。

そこで本稿では、史実と説話世界の双方を対象にしつつ、ひとまず慶祚を中心にして、成信と重家の同時出家を考察することとする。

一　成信・重家同時出家―史実的見地から―

まず説話の輪郭となった出家の史実について述べておく。

成信と重家の同時出家の経緯は『権記』に詳しい。長保三年（一〇〇一）二月四日条によると、二人は三日の夜に三井寺に至ったという。出家しようとしている知らせを聞いた二人の父親である

藤原道長と顕光も同寺に急行している（成信は道長の猶子となっていた）。おそらく出家を思い止めさせようとしたのだろう。四日中に両大臣は帰京しており、成信と重家の意志は固く、説得できなかったらしい。また翌日条には、重家の叔父の大蔵卿正光と従弟の蔵人辨朝經（朝光の子）が三井寺から帰京している記事が見られる。やはり重家の翻意を促したがかなわなかったのであろう。この出家が周囲に大きな影響をもたらしたことが、両大臣や一族の者の慌てぶりから察せられる。

ところで『権記』には成信・重家と慶祚が接触した記事は見られない。しかし慶祚は『寺門傳記補録』十五や『元亨釋書』四の慧解二によれば、正暦四年（九九三）八月に山門・寺門の紛争のために比叡山を離れて大雲寺に身を寄せ、さらに長徳の初めには三井寺に移り、龍雲坊を創立して以降は寺の隆盛に尽くしたという。その後に他へ移った記事は見当たらず、成信・重家の出家の時点では三井寺に在住していたと言っていいだろう。また『寺門傳記補録』十五には、成信の実父致平親王は、慶祚の師である余慶のもとで出家して三井寺に滞在したことも記されている。『権記』に記述が見られなくても、その縁で二人が慶祚を訪ねた可能性は高く、史実とみなして差し支えないだろう。

さて『権記』二月四日条には、特に成信の出家理由について詳しく述べてある。

去年丞相累月有恙、亞將于朝于夕嘗藥無遑、乃其病痾無損、夏過秋來、近侍童僕緩怠疎略、亞將毎見人心之變改、勵情匪懈、僅及八月中、丞相之病平癒、其後未經幾程、早以遁世、在俗舊朋等到訪之時相語云、榮華有餘、門胤無止之人、受病臨危之時、曾無一分之益、殆失二世之計、丞相嘗藥之初、弟子發心之初、今遂宿念、諸佛冥護也、[注1]

この記事から、成信発心の直接の原因が道長の病であったことが分かる。[注2] 一条天皇の外戚として時代最高の栄華を極め、子孫に恵まれた道長も、病となれば普通の人間と同じく苦悶するだけであった。必死に看病する成信は、人間の弱さ、生の儚さを痛感したことだろう。その上、記事によれば、他の近臣たちは病が長引くにつれて次第に奉仕を粗略にしていったという。『権記』には明記されないが、その懈怠心には政略上の理由もあったのかもしれない。栄華の絶頂にある道長にすがり、紐帯を結んで、一族の繁栄や名利を保証されていた近臣がほとんどであっただろう。彼らにとって道長への奉仕は、結局は自分のために奉仕することが目

的だった。道長が重病で回復の見込みが少ないと察知されたとき、多くの近臣にとっては、次期権力者に近づいて忠心を示すことの方が大切となる。おそらく成信は、このような貴族社会の矛盾を見せつけられたのだろう。人間や社会に対する不信や落胆は想像するにかたくない。

成信の人柄を、行成は「才學雖モ乏シト、情操可シ取ル」と評価している(『権記』同日条)。貴族社会の人間関係の暗部は、成信だけではなく誰しもが感じていたはずである。多くの貴族たちは、処世のためには、半ば目をつむり、やむなく妥協することで、日々生活したことだろう。しかし、感受性豊かで情にもろい成信は、あまりに純粋であったために、正気を失って苦しむ道長の様子と人の心の変わりやすさを一度に体験し、無常の思いを深めていったのかもしれない。[注3]

『権記』には、行成と成信が同車して参内、同宿する記事が散見される。出家事件前日の条には、行成が結成の間に仮眠した際に、成信から出家の決意を書いた手紙を渡された夢を見たこと、道長の所で成信に会い夢のことを告げると、笑って正夢だと言われたことが記される。「月來造次ニ談リ出家之志ヲ、又不レ隔テ中心ヲ之人也」とあるように行成と成信は親しく、あらかじめ出家の志を聞いていたことも察せられる。『権記』の成信の出家理由はほぼ史実とみなしてよいだろう。

重家の出家理由については、『権記』二月四日条には、

年來雖モ有リト本意ヲ、不レ能ハ入道スル、去月晦與ニ成信朝臣一要束已ニ定ム、一夜同道到リテ三井寺ニ、遂ニ以テ剃髪ス、所謂遇フ善知識之誘引ニ者歟、

と書かれている。

この記事からは、重家が数年前から出家の意志を持っていたこと、あらかじめ前の月に成信と出家の約束をして三井寺に行ったことが読み取れる。

藤本一恵氏は、重家出家の理由に長徳四年(九九八)の姉の元子(承香殿女御)の異常出産を指摘されている。[注4]『栄花物語(浦々の別)』には、元子が出産のときに子どもではなく水を生んだという奇妙な話が書かれている。これによって、元子は皇子の母となる機会を失ったばかりか、世間からも冷評されたという。時に重家は二一歳(『権記』より逆算)、前年には右近衛少将に任じられている(『権記』長徳二年九月九日条)。これからが出世という矢先に起こった姉の身の不幸は、重家に官界で生きる厳しさを鋭く示すことになったであろう。『栄花物語』の作者は元子の不運に対して「何ごとにつけても定めなくこそ。」[注5](二九二頁)と感想を添えている。感受性の鋭い重家もまた、一族や世間の期待を一身に受け

ていた姉が、出産を境に不運となったことをまのあたりにして、無常感を深めていったようである。

しかし、成信・重家にとって俗世間から離脱することは容易ではなかった。あらかじめ申し合わせて「一夜同道」三井寺に至った二人には、一人では出家する勇気を奮えない、それなりの背景があったようである。

ここで改めて二人の略歴に触れると、成信は故入道左大臣源雅信の孫で入道兵部卿致平親王第二子であり、出家当時は道長の猶子になっていた。時に二三歳で従四位上右近衛権中将だった（以上『権記』長保三年二月四日条）。家系や将来性から察しても、成信には父出家後の一族をもり立てるように期待がかけられていたことだろう。一方重家は、関白兼通の孫で、右大臣顕光の唯一の息男であった。出家の時には二五歳で、従四位下左近衛少将に任じられていた（『権記』同日条）。『栄花物語（浦々の別）』では「女御の御一つ腹の御兄も、少将にて人にほめられておはす」（二八二頁）と述べられ、『大鏡（兼通伝）』にも「心ばへ有識に、世おぼえ重くてまじらひたまひしほどに」[注6]（二一二頁）と表現される。世間の評判も高い重家は、右大臣の嫡男として一族から将来を託されていたはずである。『権記』によれば、出家の翌日に行成が顕光を訪問すると、「心神不覚」のために面会を断られたという。重家に期待をかけていた顕光の呆然自失の様が目に浮かぶようである。感受性豊かな成信・重家は、自分たちが出家することによって一族に与える不利益、政界の動揺を承知しており、どちらも一人で踏み切る勇気がなかったのだろう。そのために二人で慰め励まし合いながら一緒に出家したと考えられる。

二　余波

さて、現役の左右両大臣の子で出世・栄達が約束されていた二人が同時に出家した事件は、当時の貴族社会に大きな反響を呼んだらしい。折しも人々が像法・末法の世が近づいたと評している頃の出来事である（『権記』長保二年六月二十日）。『日本紀略』によれば、長保二年の冬から翌年の秋にかけては、天下に疫病が蔓延し、道路に横たわった死体は数知れないほどだったという。不安定な世相のなかで人々は無常感を抱き、多少の差はあれ俗世間から回避したい気持ちを持っていたことだろう。成信・重家の思い切った行動は、出家を思う人にとって深い感慨をそそられる事件であったと思われる。そのことが察せられる例として『公任集』の次の和歌が挙げられる。[注7]

成信の中将出家してのつとめて、左大臣行成の世をはかなき事聞え給りけるに

思ひしる人も有ける世の中にいつをいつとて過すなるらん　（二二八）

雪ふるに入道成信の中将のもとに

ふれば先君がすみかを思ふかな雪は山辺のしるし成けり[注8]　（二二九）

二二八番歌は、詞書のとおり、成信・重家出家の翌朝に行成と語り合った際に詠まれたのだろう。世の無常を悟って出家する人もいるなかで、煩わしい俗世間に身をゆだねたまま明け暮らす後ろめたさが込められた歌である。「いつをいつとて」という同語の繰り返しには、現在の自分の重苦しい気持ち、また、その状態が今後続くことを予感しての目の前が暗くなるような思いが込められているのだろうか。潔く出家した成信に対する羨ましさと、出家を思いつつも世を捨て切れない悲哀感が伝わってくる。また二二九番歌は出家後の成信に送った歌である。雪は山辺のしるしであり、山辺を思い出させる。そして、その山辺にはあなた（成信）が住んでいる。公任の成信に対する深い思いが伝わってくる一首である。

ここで成信・重家出家に対する行成と公任の気持ちを少々考察しておく。

『権記』には、世相の不安、人の病や死に際して、行成が深く無常感をそそられた記事が散見される。従弟の成房と無常の思いを交わし合った和歌も見える。[注9] 行成自身もたびたび病に悩まされて俗世から出離する思いが強かったらしい。しかし、父義孝は行成が三歳のときに亡くなり、従兄花山天皇の退位・出家とそれに伴って叔父義懐の出家したなかで、行成に託された一門の期待は非常に大きかったと考えられる。また『権記』には、行成が妻子を気遣っている記事も散見され、[注10]『栄花物語（もとのしづく）』には長家室になった娘の死を悲しむ様子が哀切を帯びて語られている。家族愛に満ちた人でもあったらしい。周知のごとく勤勉実直で責任感の強い行成は、出家願望を持ちつつも、政治家としての使命、出家によって一族にもたらす悪影響等を慮ってか本意を果たせなかった。三上啓子氏が、『権記』をもとに成信・重家出家前後の行成と成信の交流を年譜式にまとめられている。[注11] それを参考にすると、行成はたびたび出家後の成信を訪問して「談リ二心事ヲ一」あっていたことがわかる。行成は成信に本心を打ち明けるとともに、その対話を通じて本来の自分を見直す手掛かりとしていたのかもしれない。

一方公任は、摂関家の嫡男として、将来の栄達の可能性を秘めて出生した。その分誇り高く、人を見下す面があった逸話が『大鏡（頼忠伝）』『十訓抄（第四の十八）』等に伝わっている。しかし

政権が花山天皇から一条天皇に移ってから、その人生は暗転した。そして長保年間の公任は、杉田まゆ子氏によると、事あるごとに対立してきた道長の体制に屈従して歌人としての活躍の場を確保していたという。[注12] また小町谷照彦氏は、公任は若年から人の死や出家を見聞きして無常感を抱き、出家願望を育てる一方で、自負心から俗世に身をおいていたことを指摘されている。[注13] 成信・重家の出家は、公任にとって、歌壇での栄達を追求する自分が本当の自分なのか、自分が本当に求めるものは何なのか、はたと考えさせる出来事だったのかもしれない。引用した和歌には、その気持ちの一端が表出されているのだろうか。

成信と重家の出家は政界に大きな動揺を与えたはずだが、行成や公任は二人に対して非難の感情は持たなかったようである。

出家願望を抱いた貴族の多くは、一族のためや政治家としての使命感、または栄達への希求等、様々な理由があって俗世間から容易に出離できなかった。そんな彼らにとって、潔く出家した成信と重家は、自分が果たせない思いを実行したという意味で、「隠遁の代償体験」[注14]者と捉えられたのかもしれない。

なお、二人の出家理由についても、世人は憶測を重ね、折に触れて語り合ったようである。『権記』長保三年三月五日条には、或る人の説として、成信・重家が豊楽院の荒廃を見て無常感を深めたことが記されている。このことから二人の出家の理由について様々な噂が流布していたことが推察できる。成信・重家の同時出家は、当初から人々の心に浸透していた伝説的な出来事であったと言えよう。

三　慶祚の人柄

それでは成信と重家の出家に立ち会った慶祚はいかなる人物なのだろうか。『大日本史料』第二編ノ十五の寛仁三年十二月二二日条や『僧伝史料（一）』[注15]などを手掛かりにして人物像を考えてみたい。

慶祚の俗姓は太政官の外記を世襲した中原氏で、父親は大外記師元であると伝えられている（『元亨釋書』四の慧解二、『寺門傳記補録』十五）。師元と言えば『中外抄』の筆録者である中原師元が想起される。文献に見える人物がその師元であるとすると、生まれは天仁二年（一一〇九）で、子の清定は『尊卑分脈』には後に平清盛の子となったとあり、慶祚とは時代が合わない。なお中原師元は、摂政忠実、後に関白基実の家司として忠実に働いていたという。[注16] 慶祚が彼の子として伝承されたとすれば、そこには何か深いわけがありそうだが、これについては本稿では問題点を指摘するにとどめておく。師は、山門寺門対立で有名な三井寺の余慶

であり（『寺門高僧記』二など）、その他にも禅耀と千観に学び（『寺門伝記補禄』十五、『園城寺傳法血脈』）、顕密両宗に博く達していた。なお、千観については『発心集』巻一の四に、公請を勤めた帰り道に空也上人に会って教えを受けたことがきっかけで遁世した逸話が見られる。『日本往生極楽記』十八にも伝が見え、「阿弥陀の倭讃廿余行を作りて、都鄙老少、もて口実となせり。極楽結縁の者、往々にして多し。」[注17]（二九頁）と、民間布教にも携わり広く知られていたようである。

さて慶祚は『元亨釈書』四の慧解二には「園城寺雖モ智證興建スト。徒衆尚ホ寡ナシ。及リテ祚之來タルニ。學者四方ヨリ麕キ至ル。三井之道此ノ時ヨリ爲リ熾ン。徒屬益ス繁シ。」[注18]（八一頁～八二頁）と記され、慶祚が三井寺に移ったことで学徒が四方から集まり、三井寺の教学は盛んになったと伝えられている。また、余慶の四神足の一人として観修・勝算・穆算と共に名が上がり（同書十一の感進三）、能書であると共に顕密長論議の第一人者だった（『大雲寺縁起』）。『真言伝』六、『古事談』巻三ノ三一には、法華経を読むと口から光明が放たれたという奇譚が記されている。慶祚は徳が高く、また人を引き付ける魅力や包容力があったということなのだろうか。

また注目すべきなのは増賀や源信と交流があったと伝承されていることである。まず増賀との交流については『元亨釋書』四の慧解二に、

増賀法師有リ疾。祚往キテ而問フ之ヲ。曰ハク。公之病ハ。三諦ノ中何ノ患ヒ乎ト。賀曰ハク。空諦無シ病。中諦亦有リ亦無シ。今我所ハ患フ假諦耳ト。祚曰ハク。公之所ハ觀ズル似タリト隔歴ニ也。即チ説ク園融三諦及ビ止観ノ病患境ヲ。賀聞キテ垂レル涙ヲ。病又尋イデ愈ユ。（八二頁）

とある。これによると、増賀が病になったときに、慶祚が訪れて円融三諦の説と摩訶止観の病患境の文を説いたところ、増賀は涙を流し、病も癒えたという。この部分は『寺門傳記補録』十五とほぼ同文で、『寺徳集』上には、増賀の涙は記されないが「天下鳴ラス舌ヲ、上人作レス禮ヲ云々」[注19]とある。この増賀と慶祚の関わりがいつのことなのか不明であるが、二書に増賀が涙を流したとあるのは注目すべきである。増賀は名利を厭い奇行で世人を驚かせたが、三木紀人氏によると「情動は怒りの方向に向かうことが多い」[注20]人物であり、めったに泣かなかったらしい。増賀が病身であるとは言え、感涙させた慶祚はよほど高徳で、純粋な信仰心を持った人だったと言えよう。

源信との交流についても『元亨釋書』四の慧解二に、

横川寛印。三井定基。爲ス二睿山内論議之匹一ト。印者源信法

師之徒也。信語リテ印ニ曰ハク。内論者ハ雖モ家事ト。而新學之發軫也。子有ル意乎ト。印曰ハク。入學之初メニ。知ルヲ有ルレ此ノ事ト。豈ニ可ケン始メテ愕ク乎ト。信曰ハク。子之言壯也。然レドモ彼コニ有リ慶祚ト。恐ラク潤ニ色セン基ヲ。子不ルレ可カラレ緩クス也ト。（八二二頁）

とある。この記事から、源信が弟子の寛印に、論議の相手の背後に慶祚がいるから油断しないように諭していることが分かる。速水侑氏が詳述されているように源信は論議に優れており、[注21] 寛印もまた、引用文の他にも『続本朝往生伝』十五に「深く法味を悟りて、旁く経論に達せり。決択の道に就きて、誠に傍輩に絶れたり。」（二三九頁）とあり、優秀なことで知られていた。源信が慶祚の学徳を認めかつ重んじていたことが窺える。さらに『古事談』巻三ノ三十に、

恵心僧都、慶祚阿闍梨と、互に遷化の期を告ぐべき由を契りて、年月を送りたるあひだ、大阿闍梨、後夜の行法のために、縁に出でて閼伽を供ふるあひだ、空に異香あり。幽かなる声ありて云はく、「われはこれ極楽に久しく住める菩薩なり。化縁已に尽きて遂に極楽に生まる」と云々。慶祚これを奇しみ尊びて、忽ちに専使を差して、横川の僧都に、久しく申し承らざる由を案内すと云々。使者帰り来たりて云はく、「僧都、この暁入滅せり」と云々。[注22]（二四三頁）

と、源信と慶祚が往生のときを互いに教え合う約束をし、源信が約束どおり往生を告げた話が見られる。[注23] 増賀のような奇行はないものの、源信も終生名利を避け続けた人物である。この説話は源信の往生譚であるが、それだけではなく二人の高僧の心の通じ合いも描かれていると思われる。

慶祚が増賀や源信といかなる場で交流したのか、伝承がどこまで史実に近いのか検討の余地は多い。それにしても慶祚が名利を嫌った二人と親交があった（と伝承されている）ことには注目すべきである。慶祚には増賀や源信を引き付ける（または、そのように伝承されるような）魅力があったのだろう。

これまでの検討から、慶祚は、三井寺の発展に尽くしたこと、優れた徳を備えていること、増賀や源信との交流から察して純粋な道心の持ち主らしいことが見えてくる。また慶祚は往生を強く願った人でもあった。『小右記』長元二年（一〇二九）九月十八日条には、実資が亡き慶祚を回想した記事が見られる。そこに慶祚が最後の一念を重んじて茸類は一切口にしなかったとある。修行のために肉や魚介類を摂取できない僧にとって、茸は貴重な栄養源だったはずである。慶祚は干死をして往生しようとしたのだろうか。この記事に実資の主観が入っているにしても、茸を断った

慶祚に極楽往生に対する強い願望があったことが察せられる。また『真言伝』六には、臨終に及んでも後生を憂えていたことが見える。そして後述するが慶祚は無事往生できたとされている。しかし、彼は『日本往生極楽記』以下の往生伝には取り上げられていない。『続本朝往生伝』一に一条朝の学徳の一人として、また二五に助慶の師として名前が上がり、『後拾遺往生伝』下・十九に寂禅の師として記されてはいる。しかし慶祚自身が主役の往生伝はないのである。それは慶祚に官僧の印象が強いためだと考えられる。

『僧伝史料（一）』などを手掛かりにすると、『小右記』や『御堂関白記』に、慶祚が遵子の出家や昌子内親王の出家・病のときの読経・葬送に参加したこと、実資から行願寺造塔の戸の数について意見を求められたこと（寛仁三年（一〇一九）九月十二日）など貴族と関わる記事が散見され、朝廷との結び付きが察せられる。その中でも最も印象的なのは慶祚遷化の記述である。木下資一氏が指摘されるように[注24]どれも上層貴族の名が一緒に登場しているのには注目される。まず、『小右記』寛仁三年十二月五日条には、

五日、丁亥、（前略）、大納言（公任）云ヲ、昨向ニ三井寺一、為レ訪ズル慶祚闍梨ノ病ヲ、然レ以テ相逢フヲ、非ズ二危急ノ人一、然ルニ而彼ノ闍梨云ハク、今日ハ可キ二難ヲ過グ者、一談ノ後即チ歸退ス、左大將（教通）云ハク、今暁夢ミル慶闍梨詣ツル二極楽ニ一之想ヲ、子ノ日可キ二入滅ス一者、明日欤、其ノ夢躰極メテ貴ク、大躰、色、雲内天人音唱ス、空中ニ有リテ船、中ニ載ク レ棺ヲ、是レ慶闍梨迎ヘル二極楽ニ一云ヽ[注25]、

と、公任が三井寺に慶祚を見舞ったこと、この日は何事もなく帰宅したこと、教通が慶祚の極楽往生の夢を見たことが記される。そして同年十二月二四日条には、

廿四日、丙午、（前略）、宰相（資平）來タリテ云ハク、一昨慶祚阿闍梨遷化ス、年六十七、

と、藤原資平によって実資が慶祚の死を知ったことが記されている。少し時代がくだって『扶桑略記』同年十二月二二日条には、

廿二日。戊時。三井寺大阿闍梨慶祚於二龍雲坊一遷化ス。□年□件夜。大納言左近衛大将藤原朝臣教通夢見ル。從リ二東ノ山川一紫雲聳エ昇ル。雲中ニ放ツ光ヲ。並ビテ二聖衆一前後ニ引導ス。音樂滿ツ宮ニ。指シテ二西方ヲ一行ク。主上階下皆出テ見ルレ之ヲ、有リテ人告ゲテ曰ハク。是レ三井寺ノ慶祚阿闍梨之往二生極樂一也。已上則チ以テ夢ヲ告グ。奏二達スト陛下一ニ。云々。[注26]

と慶祚の往生の話があるが、やはり教通の夢見によるものとして記されている。これは『明匠略伝』日本下にもほぼ同内容で見ら

れる。教通は道長の三男、母は倫子。色好みぶりでも名高く、『栄花物語（第二一、後くゐの大将）』や後の『宇治拾遺物語』巻三ノ三にも逸話がある。慶祚遷化の二年後に内大臣に昇格し、『大鏡（道長伝）』に「世の二の人にておはしますめり。」（二九九頁）と記される政権の中心的存在である。古代人は夢を深く信じ、一つの現実と考えていたから、[注27] 慶祚の往生は認められていたのだろう。しかし、慶祚遷化の周辺に貴族の名が必ず見え、その往生が教通の夢とともに伝承されていることには注目される。慶祚が上層貴族たちによく知られ、かつ深く結び付いていたことを暗に示しているのだろうか。

以上の考察から、慶祚は、徳が高く純粋な道心の持ち主であるとともに、体制加担者的な面もあったことが見えてくるようである。

四　涙の描写

成信・重家同時出家が多くの文献に取り入れられたことについては既に触れた。中でも『発心集』における出家譚については、『今鏡』に依拠しつつも独自性があること、[注28] また史実（『権記』）・『古事談』・『続古事談』・『愚管抄』との異同に関することがつ[注29]とに研究されている。『発心集』の説話は、他の説話に見られない表現や説話形成の方法が特徴的であると言えるが、その一つとして、慶祚と成信・重家とのやりとりの描写には注目される。

(1)（成信に対して）阿闍梨、「あたらしき御様なるのみにあらず、名高くおはする身なれば、便なく侍りなむ」とていなび申しければ、あからさまに立ち出づる様にて、みづから髪を切りて、「かくなむまかりなりたる」とありける時ぞ、云甲斐なくて許し聞こえける。（二二五頁）

(2)（成信・重家に対して）さしもすぐれ、さるべき人だにもあたらしかるべきを、かく同じ心にて形をやつし給ひつれば、阿闍梨涙を落しつつ、かつは惜しみ、かつはあはれみけり。（二二五～二二六頁）[注30]

(1)については、『今鏡』に類似表現があるが、[注31] (2)は田中宗博氏が指摘されるように[注32]『発心集』に独自な描写である。氏はこれらの表現について、慶祚は「世俗（名声や家柄・容姿）に顧慮する愚かな人物として」成信・重家と「対比的に描かれ」、(2)の場面で二人の発心に「宗教的感動をうけ」て導かれたと解釈されている。[注33] しかし私にはそうは思えないのである。というのも先の考察から慶祚に純粋な道心があると言えそうな上に、この部分に彼の涙の描写[注34]があるからである。

『無名草子』には次のような涙に関する語らいがある。

（略）涙こそ、いとあはれなるものにて侍れ。情けなき武士の柔らぐことも侍り。色ならぬ心のうち現はすもの、涙に侍り。いみじくまめだちあはれなる由をすれば、少しも思はぬことにはかりにもこぼれず。[注35]（十九頁）

ここから、中世初頭（あるいは王朝時代も含められるのかもしれない）には、涙は心の奥底にある真の思いの表現と認識されていたことが察せられる。このことを考慮すれば、慶祚の涙にも、彼の何か複雑な心の機微が表現されていると言っていいだろう。

ところで、こうした貴公子と戒師の対話については『栄花物語』の顕信と行円、また田中氏の指摘されるように『多武峰少将物語』の高光と良源のやりとりに類似する場面があることが想起される。[注36]どちらにも、貴公子の純粋な道心を知りつつ世俗を配慮せずにはいられない戒師の心の葛藤、そして涙が描かれている。阿闍梨として慶祚と立場の等しい良源とを比較したいので、ここでは後者を紹介しておく。

（高光）「それ」とのたまふ。阿闍梨もなきて、うけたまはらざりければ、御もとゞりを、てづからかうぞりしてきりたまひにければ、「いかゞはせむ」とて、なほそりたまひける。ぜんじのきみ、なきまどひたまひけり。阿闍梨も、「いとあさましきわざかな。御はらからの君たちも、おのれをこそのたまはめと、御せうそこをだにも、きこえあへずなりぬる」となく。[注37]（四七七頁）

この場面では、出家を要求した高光に対して、良源が拒否して泣いたこと、伊尹らの非難を恐れた良源が重ねて涙を流したことが記されている。良源は摂政藤原忠平に認められて以後、忠平の子の師輔、さらにその子息たちに重んじられ、藤原氏との紐帯の強いことが指摘されているが、[注38]この部分から彼が世俗を非常に気にしていることが読み取れる。しかし、結局は良源のもとで高光は出家を果たした。このことについて三木氏は、良源は自分と横川の将来に支障があると知りながら、持ち前のやさしさによって「高光を説得できなかった。というより、説得しようとしなかった」[注39]との見解を示されている。貴公子出家にやむなく立ち会うことになった良源の権力との狭間で揺れる心、それが涙の描写には集約されているのだろう。そして、慶祚についても、やはり同様のことが言えるのではないだろうか。

先に考察したが、慶祚はときの権力者と関わりが深く、官僧の印象が濃い。そして成信・重家は、官界で栄達・出世の路線を生きることが期待されていた。その二人を出家させることは、慶祚にとっては立場を不利にする迷惑なことであっただろう。いったん出家への協力を拒んだ引用文(1)の場面では、彼の世俗的配慮が

窺える。しかし、権力者の目を気にしつつも、慶祚は成信と重家の道心の深さを実感し、結局出家を翻意できなかった。先に引用した三木氏の言をお借りすれば、翻意しようとしなかったのかもしれない。『発心集』では、そのような慶祚のやさしさが、涙の描写とともに細やかに表現されていると考える。

結びに

貴公子出家譚にある程度の型が形成されているのか、長明が成信・重家出家譚を執筆する際に『栄花物語』や『多武峰少将物語』を参考にしたかは不明である。ただ、長明は『宝物集』をよく読んでいたらしく、[注40] その巻四には、高光・顕信・時叙・成信・重家・相任・業房（成房）など、俗世から離脱した貴公子の名が列挙されている。長明が高光や顕信と成信・重家出家譚を同様に扱う契機は十分にあったと考えられる。そして慶祚に対しても、良源（もしくは阿闍梨ではないが行円）のように、世俗と真の道心の間で揺れた人物として認識していたことは否定できない。

なお三木氏によれば、長明はよく泣き、かつ涙とともに記憶される人であったという。[注41] その分、涙に対して深い思い入れと理解があったことだろう。長明が『今鏡』にない涙の描写を取り入れたのは、慶祚のような高徳の人になぞらえて泣き虫な自己を表出し、正当化する意識があったのかもしれない。とともに、あまり表立ってはいない慶祚の真情を発見した長明が、涙に託して慶祚の細やかな内面を表現していたと言えるのではないだろうか。

注

注1　引用は史料纂集『権記』により校訂に従って一部表記を改めた。以下同じ。

注2　『御堂関白記』長保二年四月二三日条に発病の記述がある。『権記』同年五月二五日条によれば、道長の様子は「怒目ヲ張リ口ヲ、忿怒非常也」であり、行成に「是ノ世ハ無常也、可シ愁フ〻〻、可シ悲シム〻〻」と深い無常感を抱かせるほどの重病だった。

注3　なお、藤本一恵氏「右中将成房の出家―権記を中心として―」（『仏教文学研究（二八）』昭和43　法蔵館）、関口力氏「有力貴族子弟の出家―源成信」（『平安の都』平成6　朝日新聞社）は、成信出家の原因の一つに長保二年十二月二六日の定子崩御を指摘している。また藤本氏は、成信が三歳のときの実父致平親王の出家など、成信が幼いころから接した近親者の出家も要因になったと指摘している。

注4　藤本氏の注3前掲論文。
注5　新編日本古典文学全集31より引用。以下同じ。
注6　新編日本古典文学全集34より引用。以下同じ。
注7　新日本古典文学大系28『平安私家集』より引用。
注8　二二九番歌は、『拾遺和歌集』巻第二十・哀傷・一三三五に「成信、重家出家し侍ける頃、左大臣行成がもとに言ひ遣はしける」（新日本古典文学大系7より引用）を詞書として、また『後拾遺和歌集』巻十七・雑三・一〇三一に「世をそむく人、あまた侍りける頃」（新日本古典文学大系8より引用）を詞書として重出している。
『今昔物語集』巻第二四「公任大納言於白川家読和歌語第三四」にも見える。
注9　長保二年十二月十九日条に、
世中乎如何爲猿と思管起臥程尓明昏須假名（行成の詠）
世中乎無墓物ト乍知如何爲猿と何加嘆鑒（成房の詠）
との歌の贈答が記される。
注10　成信・重家出家前後では、管見では、長保二年二月二五日、十二月十六日、長保三年八月一日、十二月二九日等に見られる。
注11　三上啓子氏「源成信・藤原成房年譜―公任集の基礎的考察(2)」（「国文鶴見」25　平成2・12）
注12　杉田まゆ子氏「長保年間の公任―『公任集』における道長と公任―」（「国文目白」31　平成3・1）
注13　小町谷照彦氏『藤原公任』（集英社　昭和60）二三三頁。
注14　三木紀人氏が「東山と大原―山里の典型」（「国文学」昭和51・6）で使われている言葉を借用した。
注15　佐藤亮雄氏『僧伝史料（一）』（新典社　平成元）
注16　新日本古典文学大系32『江談抄　中外抄　富家語』の解説より紹介した。
注17　続・日本仏教の思想1『法華験記　往生伝』より引用。以下、往生伝による引用は同書による。
注18　新訂増補・国史大系31『元亨釋書』より引用。以下同じ。
注19　『大日本史料』第二編ノ十五、寛仁三年十二月二二日条に所収の記事より引用。
注20　三木紀人氏『多武峰ひじり譚』（法蔵館　昭和63）一八九頁。
注21　速水侑氏『源信』（吉川弘文館　昭和63）。
注22　古典文庫60『古事談（上）』（現代思潮社刊）より引用。
注23　この話は『十訓抄』第五の四にもほぼ同文の説話がある。ただし、『法華験記』八十三、『今昔物語集』第十二の第三

十二、『元亨釋書』四の源信伝に関連説話があるが、慶祚ではなく慶祐となっている。この点について、注17前掲書の補注では慶祐と認めるが、河村全二『十訓抄全注釈』（新典社　平成6）では慶祐と源信では時代が合わないこと、『元亨釋書』で源信が慶祚を高く評価していることを根拠に、慶祚であるとの見解である。慶祐の生没年が不明のため確かなことは言えないが、『僧伝史料（一）』などを参照すると、慶祐は、『権記』寛弘四年（一〇〇七）十一月八日を最後に文献上は見えなくなる。源信が亡くなったのは長和六年（一〇一七）である。そこに十年の開きがあり、源信の死以前に慶祐が亡くなった可能性は高い。よってここでは、後者の説を取っておく。

注24　木下資一「『撰集抄』慶祚説話についての覚書―密航僧戒覚の伝聞の流伝と再生―」（「富山大学国語教育」8　昭和58・11）

注25　引用は大日本古記録『小右記』により、校訂に従って一部表記を改めた。以下同じ。

注26　新訂増補・国史大系12『扶桑略記』より引用。

注27　西郷信綱『古代人と夢』（平凡社　平成5）

注28　山内益次郎氏『今鏡の研究』（桜楓社　昭和55）二二二～二二四頁、藤島秀隆氏「『発心集』における伝承―『今鏡』との関連をめぐって―」（『中世説話・物語の研究』桜楓社　昭和60所収）のご論考は『発心集』における出家譚が主として『今鏡』に依拠していることを指摘している。さらに山本一氏「貴族道心譚から見た『発心集』―説話構成の方法と方向―」（「日本文学」昭和51・12）、田中宗博氏「『発心集』貴族説話少考―成信・重家・有仁をめぐって―」（「国文学研究ノート」19　昭和61・7）のご論考は、『今鏡』等を受容しながらも独自性があることを指摘している。

注29　三木紀人氏の新潮日本古典集成『方丈記　発心集』（新潮社　昭和51）二二三～二二六頁の頭注、竹鼻績氏の『今鏡全訳注（中）』（講談社　昭和59）三三三～三三七頁ほか、注28で前掲した山内氏と田中氏のご論考でも指摘している。

注30　新潮日本古典集成『方丈記　発心集』より引用。

注31　「名高くおはする君だちにおはするに、びんなく侍りなむ」と否び申しけれど、かねて御髪をきりておはしければ、慶祚阿闍梨許し聞えてけり。」（『今鏡全訳注（中）』二二八頁より引用）との表現がある。

注32　田中氏の注28前掲論文。

注33　田中氏の注28前掲論文。

注34　なお『発心集』巻五の一にも、唐坊法橋の深い道心を知った慶祚が「阿闍梨涙を落して、「定めていなびすらんとこそ思ひつるに、まことの道心者なりけり。いとたふとし」とぞほめ給ひける。」（二〇三～二〇四頁）「と涙を流した」描写がある。

注35　新潮日本古典集成『無名草子』より引用。

注36　田中氏の注28前掲論文。

注37　『多武峰少将物語　校本と注解』より引用。

注38　平林盛得『良源』（吉川弘文館　昭和62）。

注39　注20前掲書の七四頁。

注40　山田昭全氏「鴨長明晩年の思想と信仰―宝物集とのかかわりから―」（「大正大学大学院研究論集」創刊号　昭和52・3）、「鴨長明の秘密」（「大法輪」昭和52・10～12）のご論考で指摘している。

注41　三木紀人氏は注20前掲書のほか、「長明と名優たち」（「国語展望」昭和49・6）、「『今昔物語集』と往生伝―三つの人物像をめぐって―」（『仏教文学の古典（上）』（有斐閣昭和55所収）、「増賀と寂心―その涙をめぐって―」（「国語と国文学」昭和60・12）のご論考で指摘している。

【付記】引用文献に付した傍線などの記号、及び漢文史料に付した返り点や送り仮名は私が施したものである。ただし『元亨釋書』と『扶桑略記』の返り点については引用文献に付されたとおりである。

（すみや　いよこ　一九九八年日文卒）